

〈第6回国際シンポジウム報告8〉

## 明治期の東京と名所

高 槻 幸 枝\*

### 1. はじめに

明治期の東京は、日本の首都として政治・経済の中心地であると同時に、観光地としての側面も持っており、そこでは様々な種類の観光案内書が発行されていた。それらの案内書においては、寺社や季節の花を楽しむ行楽地のような近世から存在する名所に加えて、洋風建築物など明治期に入ってから成立した新しい名所も多く紹介されている。

本報告ではこれらの案内書に注目し、まず、約170点の案内書について調査した結果<sup>①</sup>から、明治期を通じての案内書の全体的な傾向について整理する。次に、年代ごとに合計4冊の案内書を選び、それぞれの特徴や、どのような場所が名所として取り上げられ、またどのように描かれていたのかということを概観する。そして最後に、明治期の新しい名所の特色および、当時の案内書が担っていた役割について考察をおこないたい。

### 2. 明治期東京の案内書

明治期の案内書は、博覧会開催、東海道線の開通、行政界の変更などを契機として出版されることが多かったと山本（2003）は述べている。報告者の調査においても、第2回内国勸業博覧会が開催された明治14年、東海道線の全線（新橋—神戸）開通の翌年で、第3回内国勸業博覧

会が上野公園で開催された明治23年、さらに東京勸業博覧会が開催された明治40年などに発行数の増加がみられた。

発行順に案内書のスタイルをみてゆくと、初期には和装本が主流であるが、徐々に洋装本が増加し、明治20～30年代以降はほとんど和装本が出版されなくなっている。また、木版画、石版画、銅板画などにより作成されていた挿絵が40年代には写真に取って代わられている。

案内書には、このような製本や印刷における新しい技術の導入に加え、新しい表現形式も取り入れられるようになったようで、例えば、明治期の前半と後半では、掲載されている案内地図にも変化がみられる。従来、江戸の町を描く場合には、左に海、手前（画面下方）に隅田川、さらに場合によっては奥（画面上方）に富士山が描かれるという、西を上にした構図が好まれていた<sup>②</sup>。また、名所案内として有名な『江戸名所図会』<sup>③</sup>にも見られるように、鳥瞰的な表現が用いられることも多かった。このような西を上にした鳥瞰図は、明治の案内書においても10年代まではその使用が確認できる。しかし、その後、鳥瞰図的表現は姿を消し、ほとんどの案内書が平面図を採用するようになってゆく。地図の向きについては、時代が下るにつれ北を上にするものが増えてゆく傾向がみられるものの、40年代に西向き地図を掲載した案内書が出版されるなど、明治期にはまだ両者が混在していたようである。

\*お茶の水女子大学大学院人間文化研究科  
博士後期課程在学

### 3. 案内書の実例

以下では、明治10年代から40年代まで10年ごとに、それぞれの時期に発行された案内書について、その内容を見てゆく。とりあげる案内書の概要は、表に示すとおりである。

#### 3. 1 明治10年代「東京名勝図会」

(明治10年発行)

例言には、発行目的および想定される読者について、次のように述べられている。

「維新以降、世の開明に赴くに随ひ、神社・仏閣・街巷・橋梁の光景、旧誌に載するところのもの、すでに大半陳腐に属せり。いはんや鉄道・館・招魂社のごとき新名勝出づるをや。ゆゑに余みづから拙陋を揣らず、一は旧名勝の湮没せんことを懼れ、一は新名勝の繁盛することを喜び、旧誌を探り新書を抄し、要を採り繁を省きて、上下二冊となし、文中尽くしがたきは画図をもつてこれを補ひ、東京に来遊する観光探勝者の便に供す。(略)人口に膾炙しその尤拔なるを撫採し」

発行の目的は、新たに登場した名所の紹介お

よび古くからの名所の再確認であり、想定されている読者は、「東京に来遊する」とあることから非東京在住者であったらしい。

冒頭で、東京の概要や繁盛の様子が簡単に説明されており（「東京略説」）、次に「第一大区之部」から「第十一大区之部」<sup>(4)</sup>までの名所が区ごとに紹介されている。「第一大区之部」の最初に取り上げられている名所は、日本橋である。

地図（「東京区内名勝縮図」）は、西向きの鳥瞰図であり、画面奥には富士山がある。北は雑司ヶ谷、東は堀切村、南は洲崎、西は目黒あたりまでが描かれており、主要な名所がその名称とともに書き込まれている。

本文には、冒頭の「東京略説」を除いて、82件<sup>(5)</sup>の名所が取り上げられている。また、挿絵は38点掲載されている。

最も多かった名所は神社・仏閣の51件であり、その紹介文では故事来歴、現在の繁昌の様子、境内にある四季の花などの自然物、また景色や眺望の良さについての言及が目につく。これらの多くは、江戸期以来の名所であるが、明治2年に創建された九段招魂社（第三大区之部の最初に置かれている）など、3件の神社は明治に入ってから成立した名所となっている。神社以外の新しい名所としては、官庁、学校、銀行、

表 報告において紹介した案内書の概要

タイトル	明治(年)	編著者	版元	装丁	縦(cm)	頁数(頁)	挿絵	写真	価格(銭)
東京名勝図会	10	岡部啓五郎著 大谷南谷図画	丸屋善七	和	22.6	—	○	×	15
東京名所図絵	23	木田吉太郎	東雲堂	洋	18.5	—	○	×	—
鉄道沿線名所旧跡 漫遊案内 東京横浜一週間案内	34	史伝編纂所編	史伝編纂所	洋	18.6	211	○	○	—
東京遊覧案内	40	東京市編	博文館	洋	14.9	312	×	○	—

—：表示がないもの  
×：掲載されていないもの

商店といった洋風建築物が7件ほど取り上げられており、「宏壮艶麗、驚駭歎賞」「妍麗」「異域に入るの想ひ」などと形容されている。石造橋や鉄道駅なども挿絵入りで掲載され、それらの紹介文では、建造物の外見についての描写だけでなく、石橋築造や蒸気機関等の新しい技術についてや、郵便や公園等の新しい制度についても簡単な説明がなされている。

明治期の主要な名所の一つである皇城は、第一大区の部（全21件）の18番目に置かれている。本文では、まず太田道灌により築城されたことから始まりその歴史が説明される。さらに当時は「官員かつ華族」にのみ拝観が許されていたという吹上御庭の美しさが、拝観した知人から聞いた話として、事細かに描写され、想像図とともに紹介されている。

また、木造橋から石造橋に架け替えられたものの、新しく架けられたものを合わせて10件の橋梁が名所として取り上げられており、「壮麗無双の名橋」「無比の大橋」などと形容されている。本文では、橋自体というよりも、その賑わいや橋上からの風景など、橋を中心とした周辺の様子について述べられているものが多いが、複数の橋梁が見物の対象として紹介されている。

なお、明治4年には深川に官営のセメント工場が、6年には区部の北郊に王子製紙株式会社が発立されているが、本書には工場についての言及は無い。

### 3. 2 明治20年代『東京名所図絵』

(明治23年発行)

序言、例言などは無く、発行目的や想定されていた読者層は不明である。

地図（「東京名所略図」）は、西南西を上とした平面図で、北は飛鳥山、東は梅屋敷、南は台場、西は目黒不動辺りまでをカバーしている。

名所件数は155件であり、挿絵は49件掲載されている。目次は無く、章立てもされていない

が、これらの名所は、ほぼ当時の区（麹町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、浅草、本所、深川の15区）ごとにまとめて紹介されている。ちなみに、大区小区制は明治11年の郡区町村編制法により廃止されており、この当時の東京府は15区6郡（荏原、南豊島、北豊島、南足立、南葛飾、東多摩）となっていた。さらに、案内書発行の前年の明治22年には市制特例により東京市（15区の地域）が成立している。

最も多く取り上げられている名所は、神社・仏閣の56件である（明治に入ってから創建された靖国神社を含む）。新しい名所としては、前項と同様、官庁や会社、学校といった洋風建築物が紹介され、「宏壮なり」（第一国立銀行）、「廣大なり」（東京大学医学部）、「頗る美麗」（新橋停車場）などと形容されている。また、煉瓦街の舗装について「敷石を敷き清潔を極め雨天の時も泥濘の苦を免れしむ」という表現もみられる。その他には、電灯会社、瓦斯機、停車場などが取り上げられている。

皇城の紹介は、冒頭の、東京の概略を記した文章の後に置かれ、その外観について「頗る美麗を極めたり」と表現されている。また、二重橋、正殿、宮殿、豊明殿、吹上御庭などの名前があげられ、それぞれについて簡単な説明が加えられている。

その他には、陸軍士官学校や砲兵本廠など軍関係の施設も目につく。また、前節の案内書同様、10件の橋梁が名所として取り上げられている。鉄橋として改架された吾妻橋の項では、周囲の賑わいなどへの言及は全くなく、「其壯観なる事東京の橋中第一とす」と紹介されており、銀行などの建物と同様にその外観に価値が見出され、見物の対象となっていたことが分かる。

また、溜池について「古は有名の大池」で「夏月花の盛には美観たりしが近時荒廢して終に其跡の存するのみ」とあり、案内書が出版された

時点においては、見るべきものが無い状態であるとされている。他の案内書も含め、実際に見ることができる名所の案内（実用的な情報の紹介）が主流である中、過去の名所についての知識のみを紹介する記述は、少々珍しいものであると思われる。

### 3. 3 明治30年代『東京横浜一週間案内 全』（明治34年発行）

冒頭の「本書創刊に就いて」には、「是は、普通旅行案内、名所案内と異なり、西洋各都会に行はる、倫敦一週間案内、伯林一週間案内、巴里一週間案内等により、之を取捨折衷して東京市及横浜、江の嶋、鎌倉、横須賀等を、五日或は一週間にて、名所旧跡、神社、仏閣、古墳及演劇、寄席等残らず見了る順序道筋を、図によりて細に示し」、「詐欺師ポン引きにかゝらず、偽者不正品などを買い入れぬ様、最も丁寧親切に説明せるものなり、而して巻中に、間々名所の景趣旧跡の沿革等を面白く叙し必要と趣味とを兼攝せる旅行家必携の珍書なり」とある。

誇張もあるようだが、西洋の案内書を参考に一週間の見物コースを紹介していること、見物の道順から買い物の際の注意まで、きめ細かい案内がなされていることが特徴であるとされている。また読者について「旅行家」という言葉が使われており、東京在住者よりも、地方から東京へ旅行してくる人々が念頭におかれていたらしいことが分かる。

この案内書は、見物コースが紹介されている他に、旅館や商店との提携が強調されている点でも、前節までで紹介したものとはやや性格が異なる。提携先の旅館や商店は読者に便宜を図るということで、案内書には店舗の写真入りの広告ページや特約旅館のリストが掲載され、さらに本文においても、名所案内の道筋にある呉服店や書店の名前が挙げられて、宣伝に努めている様子を見て取ることができる。提携先の旅

館や商店では、この本の販売もおこなっていたようである。

なお、この『東京横浜一週間案内』は、日本全国の鉄道沿線の案内書である『鉄道沿線名所旧跡漫遊案内』との合冊になっているためか、奥付の売り捌き書店のリストには九州を除く日本各地<sup>6)</sup>の書店（大売捌：30件、各地売捌：104件）が名前を連ねている。これらの情報を信用するならば、この案内書は、かなり広い範囲で売り出されたものであったようである。

綴じこまれている地図（「東京新図」）は、西向きの平面図であり、北は飛鳥山、東は梅屋敷、南は台場、西は目黒不動の辺りまでが対象範囲となっている。なおこの地図の右下には、東京府を中心に埼玉県、茨城県、神奈川県、千葉県の一部までを含めた広域図（北向きの平面図）も載せられている。

名所の案内は、7日間、5日間あるいは3日間の見物コースを提示するという形式になっている。例えば7日間コースは、1日目に浅草向島を見物し、2日目に上野本郷、3日目に九段宮城日比谷、4日目に芝公園高輪、5日目に本所深川亀井戸6日目は随意遊覧、7日目は観劇案内というものである。3日間で見物する場合には、7日間コースの2日目、3日目、4日目を、5日間の場合は、3日間コースに加えて観劇2日または観劇1日と5日目の見物場所を回ることが提案されている。浅草向島が省かれる理由には特に言及されていないが、凌雲閣やパノラマなど目新しい見物対象を擁している浅草はともかく、向島には三囲神社、長命寺、木母寺など、江戸期からの名所が多いため目新しさが少なく、優先度が低いと評価されたのではないかと考えられる。

以上のコースは、鉄道馬車や蒸気船を利用して東京の市街を移動するものであるが、その他に人力車による「急行三日」コースや、1日かけて郊外の名所を2～3ヶ所見物してくる「一

日の市外見物」という項目もある。市外見物は第一から第五までに分かれ、「川崎大師、羽田稲荷、池上本門寺」や「新井薬師、堀内妙法寺、目黒不動」などが紹介されている。

案内の起点については、日本橋は「東京の中心といふべき土地」、上野附近は「地方見物人の主に定宿をとるところ」であることから「上野及び日本橋を起点とする」と「緒言」に書かれている。さらに、1日目の見物は浅草向島から始まっており（3日コースおよび5日コースでは上野本郷）、同時期の案内書の多くが皇城を冒頭に配置している中であって、本書は少数派であると言える。

名所は、第1日目から第6日目までの合計で、約130件とりあげられており、20点ほどの写真が添えられている。古くからの名所としては、明治10年代および20年代の案内書と同様、寺社や橋梁が目立つ。また明治初期から見物対象とされてきた官庁や銀行・会社などの洋風建築物については、「巍々として」「宏大」「華美」などと形容されており、明治30年代においても相変わらず、その外観は見物のため足を運ぶに値するものと考えられていたようである。

宮城は前述のとおり3日目に紹介されている。歴史などについての記述はないが、「二重橋」の項目に「(略)げに東京に來りしほどのものは、必ず必ずこの宮城を拝し奉ることを忘るべからざるなり」とされており、東京見物の際には欠かすことのできない立ち寄り場所と捉えられていたことが読み取れる。

また、王子の製紙工場について、「飛鳥山より見下ろせば、煙突の林立せるを見るべく、そぞろに文明工場の壮大を想はしむべし」という表現がみられる。煙突が並ぶ様が、文明的な景色として描かれており、本書においては工場が見物の対象として捉えられていたことが分かる。

その他の新しい名所としては、音楽学校や東京大学などの学校、西郷隆盛銅像や楠正成騎馬

銅像などの銅像、水族館や博物館などの文化施設、勸工場、さらに凌雲閣やパノラマ、見世物、新吉原遊郭（「見物」の対象として取り上げられ、「ゆめゆめ登楼などの愚をなすべからず」とある）などが紹介されている。また、見物途中で食事をとるための飲食店や土産ものを買う商店の案内、さらに旅館・商店・会社の一覧表や人力車賃金表なども掲載されており、実的な性格を見て取ることができる。また、観光に役立つものかどうかは疑問であるが、病院案内、学校案内といった項目も備え、そこには診察料・入院料や位置情報等が細かく載せられている。

### 3. 4 明治40年代『東京遊覧案内』

(明治40年)

例言には、「本書は明治四十年に於ける東京勸業博覧会の開会を機とし、各地方より上京する人々の為め、東京市内及近郊の遊覧に便せむとして編纂したるもの、体裁一に案内を主とす」とあり、博覧会開催を機に、地方在住者を対象として、東京市内と近郊の案内を目的に作成されたものであることが分かる。なお、これは、やはり東京勸業博覧会の開催に合わせて、東京市により編集・発行された『東京案内』（明治40年）の小型・簡略版である。

次に示す目次から分かるように、この本は、地方から東京への交通機関、宿泊、東京市内の交通機関、区ごとの名所、博覧会などについて紹介したもので、最終章の「如何に東京を去るべき乎」では、どこでどのような土産が買えるか、増えた荷物を郵便小包で送る方法などについてまで、懇切丁寧な案内がなされている。

「目次：如何に東京に入るべき乎／如何に東京に宿すべき乎／如何に東京を觀るべき乎／如何に〇〇区を觀るべき乎（注：〇〇には麹町区から深川区までの15区それぞれが入る）、如何に郊外を觀るべき乎／如何に東京勸業博覧会を

観るべき乎／如何に東京を去るべき乎」

このように実的な面に配慮した案内書であるにも関わらず、掲載されている地図は、「大日本交通略図」（縮尺：千五百万分の一）という「千島諸島」と「琉球及台湾」を含む日本地図（北向き・平面図）のみで、東京市内の詳しい地図はない<sup>(7)</sup>。写真は47点載せられており、口絵には二重橋が使用されている。

取り上げられている名所は351件で、その他に本書発行の年（明治40年）に上野公園を会場として開催された、東京勸業博覧会の案内が加えられている。

紹介されている名所は、その過半数が会社・銀行や官庁など、明治期に入ってから成立した新しい名所である。これらについては、その位置、設立の経緯、業務内容についてなどの紹介が主であり、建物の外観についての描写はほとんどみられない。

宮城は、区毎の案内の最初に置かれている、「如何に麹町区を観るべきか」の1番目の名所となっている。案内の文章では、官庁等と同様に、その位置と、江戸城築城から明治に入って宮城となるまでの簡単な歴史が紹介されているが、事実が述べられるのみで、建築物の外観や雰囲気についての言及はない。

また、工場については、浅野セメント合資会社、鐘ヶ淵紡績株式会社、王子製紙株式会社、東京製絨株式会社、千住製絨株式会社など数社が紹介されている。これらの案内文も他の名所と同様であり、位置情報や客観的な事実が簡単に紹介されるのみで、見物対象としての魅力が積極的に語られるわけではない。

古くからの名所としては、神社・仏閣が紹介されており、歴史、祭日および市の日取りなどについての記述がみられる。

#### 4. まとめ

本報告においては、まず明治期に発行された「観光案内書」の全体的な傾向についての紹介をおこなった。次に明治10年代から40年代までの各年代について1冊ずつ、合計4冊の案内書を取り上げて、それぞれの案内書およびその中で案内されている名所の特徴を概観した。

明治期の名所には、江戸時代から名所として人々に受け入れられてきたものと、明治に入って新たに成立したものとがある。ここでは、明治期の名所を特徴づけるものとして、新たに成立した名所（以後、新名所とする）に注目しつつ、報告の内容をまとめたい。

新名所の主なものとして、官衙、銀行、会社、橋梁、工場などを挙げるができる。明治の初頭に、洋風建築物として登場した官衙、銀行、会社などは、明治10年代および20年代の案内書において「広壮」、「美麗」、「驚駭歎賞」といった形容がなされていること、また、挿絵になっているものが多いことから分かるように、まずその外観に人々の注目が集まったと考えられる。同様に石造アーチ橋や鉄橋として架け替え、もしくは新造された橋梁も、同じ時期の案内書に多く取り上げられていた。

また、『東京名勝図会』（明治10年）には、建造物の外見についてだけでなく、電信や蒸気機関などの新しい技術および、学校や郵便制度のような新しいシステムに関する記述もみられる。

これらのことから、官庁や会社など、現代の感覚からすればおよそ見物の対象としては似つかわしくない新名所は、外観が人目をひくものであったことに加え、その中身に近代的なシステムが導入されていたという点でも、近代化を象徴する名所として捉えられ、案内書に取り上げられていたと考えられる<sup>(8)</sup>。

工場は、本報告で紹介した案内書では、30年代と40年代のものに掲載されていた。工場の多

くは当時の郊外（現在の北区や隅田川の左岸など）に立地している。『東京横浜一週間案内』（明治34年）には、前述のとおり「飛鳥山より見下ろせば、煙突の林立せるを見るべく、そぞろに文明工場の壮大を想はしむべし」と紹介されており、煙突が並ぶ景色が、産業発展の象徴として捉えられていたことが分かる。ただし、その6年後に発行された『東京遊覧案内』では、工場については、その位置と業務内容や資本金などの情報が示されるのみである。このような素っ気ない記述は、『東京遊覧案内』の名所案内全体に共通するものであるため、一概には言えないのではあるが、30年代から40年代にかけて、徐々に工場に対する見方に変化が出てきた可能性も考えられる。同様に官庁や会社についても、年代が下るにつれ、大げさな形容が減ることが、その外観に対するもの珍しさが薄れていることを示しているようにも思われる。ただし、これらに関しては案内書以外の資料も用いて、さらに検討をおこないたい。

その他に、明治期の名所として重要な位置を占めていると考えられるのが、宮城である。宮城は、本報告で紹介した案内書を含む、明治期に出版されたほとんどの案内書で取り上げられている。案内書自体の記述を宮城から始めているものや、口絵に二重橋の絵や写真を配したものの<sup>9)</sup>も多く、東京見物の際には必ず立ち寄るべき場所と考えられていたようである。

これに対し、近世の案内書において重要な名所であった日本橋は、明治10年の『東京名勝図会』では冒頭に置かれているものの、その後発行された明治23年の『東京名所図絵』や明治40年の『東京遊覧案内』では、宮城よりも後に配置されるようになる。繁華な名所であるという認識は、明治期を通じて概ね維持されるようであるが、新しい名所が登場し、また鉄道の開通により街道の起点としての意味が弱まる中で、その重要性は徐々に小さくなっているように思

われる。

以上、明治期に発行された東京の観光案内書と、その中で取り上げられている名所について、概要を紹介した。それらの案内書では、文明開化や産業発展の象徴としての近代的な名所が積極的に紹介されている。編著者が意図していたかどうかは定かではないが、結果的に、案内書は東京の名所についての知識や情報を読者に提供するだけでなく、近代的な事物をどのように捉えるかという点に関して、読者を教育する役割をも担っていたのではないかと考えられる。

本報告においては、案内書の記述のみに頼って、明治期東京の名所の特徴について紹介してきた。しかし、これらの文章はあくまでも案内書作成者の意図によるものであり、その内容と現実の東京見物のあり方や読者の意識が一致していたとは限らない。当時の社会的背景や案内書読者についても考慮に入れた、より詳細な検討に関しては、今後の課題としたい。

#### 注)

- (1) 高槻 (2004) による。ただし、この中には観光案内書だけでなく、東京の事物に関する随筆や風景の写真集なども含む。
- (2) このような構図は、歙形恵齋 (1761-1824) の頃から始まったものであるという。
- (3) 斎藤幸孝 (1834および1836) : 『江戸名所図会』、7巻20冊。
- (4) 明治7年の大区小区制の改訂により、この時期の東京府は、11大区103小区に区分されていた。
- (5) ここでの名所の件数は、目次の項目として名称があげられているものを数えた数字である。以降で取り上げる案内書についても同様の方法をとったが、目次の項目として名称が使用されていない場合には、単に名称が掲載されているだけでなく文章により紹介がなされているなど、主要な名所として扱われていると考えられるものをカウントした。
- (6) 具体的には札幌から山口まで、93都市の売り捌き所が挙げられている。
- (7) 『東京遊覧案内』と同時に、同じく東京市により発行された『東京案内 (上) (下)』 (全1591

ページ)には、「東京市十五区地図」が添付されている。

- (8) ただし、商用で上京したついでに東京見物をする、といった人々も多く存在したようであり、このような人々にとっては、官庁や銀行、会社などのデータは実用的な情報であったと考えられる。また、案内書作成者側が、そのような読者を想定して、商用と観光の両方に利用することができる案内書を発行していた可能性も否定できない。
- (9) 『東京名所図会』(明治23年)および『東京遊覧案内』(明治40年)の口絵も二重橋である。また、『東京横浜一週間案内』(明治34年)では、案内書冒頭の18ページにわたる写真ページ(1ページに4枚の写真が掲載されている)の1ページ目

に「宮城正門二重橋」が載せられている。ちなみに『東京名勝図会』(明治9年)において、最初に掲載されている挿絵は「日本橋」である。

#### 参考文献

- 高槻幸枝(2004)：ガイドブックにみる「名所」の変遷—1830年代の江戸から2000年の東京まで—、お茶の水地理、44、43-54。
- 高槻幸枝(2004)：明治期東京の案内書、お茶の水女子大学大学院修士論文(未刊行)。
- 山下和正(1998)：『地図で読む江戸時代』、柏書房、333。
- 山本光正(2003)：観光地としての東京、国立歴史民俗博物館研究報告、103、201-236。